

第5章 考察とキャリア教育・キャリア支援における今後の課題

本章では、これまでの調査結果の考察を行うとともに、これに基づいたお茶の水女子大学におけるキャリア教育・キャリア支援における今後の課題を提言する。

1. キャリア教育

(1) キャリアデザインプログラム

2011年から導入された「キャリアデザインプログラム」は、「女性リーダーのためのコンピテンシー開発」を実現することを目的として基幹科目群を中心に導入された。平成29年1月に実施した本調査の結果によると、キャリアデザインプログラム基幹科目を1科目でも受講したことがある割合は、学部生46.1%、修士院生47.0%とほぼ半数が1科目以上のキャリアデザインプログラムを受講している。また受講した科目数では、学部生では最大7科目、修士院生でも最大3科目を受講している。

そして、キャリアデザインプログラム基幹科目に対する学生の評価として、約6割以上の学生は受講を通じて「自分の将来や大学時代の過ごし方を考える」ようになったと回答している。さらに「自己理解を深めた」とする学生も半数を占める。しかしながら「進路選択・就職活動」にはあまり役に立っていないと評価されている。

これらの結果からは次の2点が示唆された。第一は、キャリアデザインプログラム基幹科目が導入から7年の間に、学生の間に着実に浸透していることである。約半数の学生がひとつでも受講していることから、知名度も上がっていることをうかがうことができる。そして普段でも授業の評価が学生間で共有され、口コミなどで履修する姿も見受けられる。また、新入生オリエンテーションでのキャリアデザインプログラムの紹介や電子掲示板での広報なども効果があることが推察される。

第二は、受講を通じて、学生が「自分の将来や大学時代の過ごし方を考える」ようになり、「自己理解を深める」など、キャリア行動に役立つという肯定的な評価をしていることである。キャリアデザインプログラム基幹科目は、導入時より「役に立つ」という学生の評価はあったが、7年を経過して行った調査でも安定してよい評価を得ている。

今後の課題としては、受講者数のさらなる増加である。大学時代そして将来のキャリアデザインに役に立つことをオリエンテーションや広報媒体を通じて伝えること、また講義内容についても、受講者の感想や講師の工夫を取り入れて改善を行うことが課題である。

(2) キャリア意識

① 将来の仕事や就職先についての考え

4章で示したキャリア意識については、平成23年度調査と比較して結果を考察する。はじめに、「将来の職業についてどのように考えているか」については、平成23年度の調査結果と同様で、「やりたい仕事がある」と答えた学生は、学年が上がるにつれて割合は多くなる傾向にある。しかし5-6割は「漠然と考えている」という結果であった。

次に、「就職先を決定する際に重視すること」については、平成23年調査と今回では異なる点が見られた。ひとつが、「産休・育休や介護休暇がとりやすい会社」を重視する学生

は、今回は学部生 78%、修士院生 80.5%が重視すると回答したが、これは平成 23 年度調査と比べると 10 ポイント程度少なくなった。そして「仕事を通して能力や技術が身につけられる」を重視する学生は学部生、修士院生ともに割合が増えており、学部生で約 7 割、修士院生は約 9 割であった。この結果からは、お茶の水女子大学の学生が就職先を選ぶ理由として、産休・育休や介護休業などがとりやすいことは当たり前のこととして学生には認識されていること、また社会人としても仕事を通じた継続的なスキル・アップを目指していることが示唆された。

②結婚・出産と就業についての意識

次にライフコースの考え方については、結婚・出産を経ても仕事を継続したいとする学生が学部生 41%、修士院生 57.7%と平成 23 年度調査と同様の割合である。そして「結婚後に仕事を辞める」は平成 23 年度調査よりも 10 ポイント程度少ない割合となった。これらの結果からは、仕事を続けたいという意識を持つ人の割合は平成 23 年度調査に比べて増加していることが明らかになった。平成 23 年度から新入生を対象に実施している『新入生の生活に関する調査』によると、新入生の約 7 割前後は「結婚・出産を経ても仕事を辞めない」と回答している。今回の調査結果と合わせてみると、入学時よりも結婚・出産を経ても仕事を続けると考える学生の割合は入学時よりも増加していることが推察された。これは大学におけるキャリア教育も含むジェンダー教育によって、学生の就業継続への意識が高まったことが要因であることが考えられた。

このように、学生において就業を継続する意識が高まっている一方で、今回から新たに追加した「性別役割分業意識」については非常に伝統的な意識をもっていることも明らかになった。例えば「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」については、賛成する人が約 8 割となっている。この結果と前述の結婚・出産後も就業を継続すると答えた人が 4-5 割であることを考えると、結婚後も就業を継続するものの家事・子育ても女性が遂行すべきと考えていることが推察される。

キャリア意識に関連するキャリア教育における今後の課題としては 3 点が挙げられる。第一に、学生が将来働き続けたいという意志を持つことができるようなキャリア教育の継続である。第二は、将来の職業について漠然としている学生の割合が多いことに関して、自身の将来の仕事や進路に関する方向付けを意識できるような内容を、キャリア科目の中でも取り入れる必要があるということである。第三として、将来において家庭と仕事の二重負担にならないようなジェンダー教育のさらなる工夫が必要であることが考えられた。すでに授業ではこのような問題は取り上げられて、知識としては学生に浸透していると思われる。しかし今回の調査結果から見えた学生の意識を考察すると、結婚・出産後も就業継続を希望するものの、家庭内労働も伝統的な役割分担で行う意識があることが明らかになった。将来の仕事と家庭の二重負担を再生産しないためのキャリア教育を行うことが課題である。

2. インターンシップ

お茶の水女子大学の学生を対象にしたインターンシップに関する調査は見当たらず、その点において今回の調査結果は貴重である。はじめにインターンシップへの参加経験は、学部生では 32.4%、修士院生では 45.9%であり、参加率として全国調査と比較すると平均的からやや高い水準にあることが明らかになった。参加時期は 7～9 月の夏のインターンシップに参加する学生の割合が最も多く、次いで 12-1 月の冬のインターンシップである。

参加期間は複数回答で尋ねたが、ワンデーを含む 5 日未満が約 2 割程度、5 日間は 1 割弱、2 週間は学部生が約 5%、修士院生が約 9%、2 週間を超える期間は、学部生 9.9%、修士院生 18.1%であった。5 日以上インターンシップへの参加も学部生では 2 割程度にもなり、学部生が積極的に職業体験をしていることが明らかになった。お茶の水女子大学は地理的にも首都圏の企業でのインターンに参加しやすい環境があり、また学生向けに、数多くの企業などからの案内が来ること、さらに学生・キャリア支援センターが実施するインターンシップガイダンスなどでの説明もあることなどによって、学生の積極的な参加を促していることが推察される。

今後の課題としては、キャリア支援行事やキャリアデザインプログラム基幹科目などを通じて、学生がインターンシップに参加する目的を理解して参加できるよう、事前に説明し、理解を促すとともに意識付けをすることが重要である。そして、インターンシップ先の情報提供についても就職情報資料室を通じて、大学からも効果的に行うことが求められる。

3. キャリア支援

(1) 進路決定の時期

キャリア行動の調査結果（第2章2.）より、学生が自身の進路を大学生生活のどの時期に決定するのかが示された。学部生が進路を決めた時期として最も多かったのは「大学3年生頃」（31.5%）であり、次いで「大学入学前まで」（23.5%）であった。大学3年生は、学びにおいては、本学が1、2年次に受講を奨励する教養教育（リベラルアーツ）の履修を終え、より高度な専門教育へと移行する時期である。学生生活では、4年間の学生生活を半分終える時期であり、大学院進学や企業団体への就職など、卒業後の進路に関する情報探索を始めることから、「大学3年生頃」に進路を決める学生が多いと考えられる。一方で、「大学入学前まで」に自身の進路を決定した学生は、大学選びと学部学科の選択が卒業後の進路選択につながると考えて、本学への進学を決定したと推察される。また、修士院生の進路決定の時期については、「大学院前期課程1年生頃」が38.1%と最も多く、次いで「大学3年生頃」（18.7%）、「大学4年生頃」（14.2%）であった。修士院生は、専門性が高い教育を経て、進路決定に至ると考えられる。

以上のことから、学部生の学生を対象としたキャリア支援は、学年別のプログラムや、各自の学びに応じたプログラムを提供することにより、学生ひとりひとりの状況に合わせたキャリア支援になると期待される。例えば、新入生（学部1年生）を対象としたキャリア支援では知識や教養を身につける重要性を理解させ、学部3年生には大学の専門教育と社会とのつながりを考える機会を提供するなど、学生が進路を考えるタイミングに合わせてキャリア支援を実施する必要があると考える。また、修士院生の学生を対象としたキャリア支援は、学部生時代のキャリア支援を踏まえて、より高い専門教育を身につけた学生が、自身の専門性をどの領域で活かすことができるのかを明確に意識し、進路選択ができるキャリア支援が必要であろう。

(2) 進路の相談相手、キャリア支援の利用状況

キャリア行動の調査結果（第2章2.）より、学部生が自身の進路を相談するのは、「母親」（71.2%）と「父親」（48.1%）の家族と、「友人」（49.3%）であることが示された。修士院生の学生は、「友人」（51.7%）が最も多く、「母親」（49.0%）、「先輩」（48.3%）、「父親」（31.5%）であった。また、学部生と修士院生では、大学教員を相談相手に選ぶかどうかの違いがあることが示された（学部生17.0%、修士院生30.2%）。大学教員以外の大学内の相談相手として「キャリア相談、学生相談室」を利用する学部生は13.3%、修士院生は19.5%であることも示された。キャリア支援の利用状況については、学部生、修士院生ともに「セミナーやガイダンス」の参加が最も多かった（学部生38.9%、修士院生47.7%）。

これらの結果より、学部生と修士院生ともにセミナーやガイダンスを利用しているが、進路を相談する相手については、学部生は自分のこれまでの経験や性格などを理解してくれる身近な人を選び、修士院生の学生は身近な人に加えて、自分の専門性を理解している先輩や大学教員を相談相手に選ぶと考えられる。また、学部生、修士院生ともにキャリア支援を専門とするキャリア相談ではなく大学教員を相談相手として選ぶのは、キャリア相談の担当者よりも大学教員の方が自分のことを理解してくれると考えていると推察する。

以上により、キャリア支援において今後検討が必要と考えられる 2 点を挙げる。まず、学部生、修士院生ともに利用状況が高く示された「セミナーやガイダンス」の一層の充実を図ることが求められるであろう。すでに、学生・キャリア支援センターが実施するキャリア支援行事（セミナー、ガイダンス等）においては、学部生と修士院生の授業等に影響がないよう昼休みの時間帯（12:30 から 13:10）に実施している。また、すべてのキャリア支援行事で参加学生を対象にアンケートを実施して、講座内容と実施時期の満足度を尋ねるとともに、実施して欲しいキャリア・就職支援を自由記述で書かせている。学生・キャリア支援センターでは、このアンケート結果を参考にしているが、これまでセミナーやガイダンスに足を運ぶ機会がなかった学生のニーズを把握する機会がなかった。大学によるキャリア支援が、学部生や修士院生のキャリア行動を支える基盤となるために、セミナーやガイダンスに参加した学生に加えて、より多くの学生を対象としたアンケート等の実施を検討する必要があると考える。

2 点目は、本調査の結果より、学生が自身の進路を考えるときに身近な人が相談相手として選ばれており、多様な価値観や考え方に触れることや、進路選択において試行錯誤する機会が少ない可能性が示された。大学生が自らの進路を探索することは、これまでの経験と学びを結びつけるだけではなく、社会の活動のなかで求められる教養や知性、能力やスキル、将来の目標や夢など、様々な側面から探索する機会であり、この探索を経て、自分が納得する進路選択につながると考えられる。そのことを踏まえ、キャリア支援においては、キャリアの専門家がファシリテーターとなるワークショップをさらに活用して、参加学生同士がお互いの価値観の違いを知ることや、自身の目標や夢を再発見するなど、学生のキャリア探索の機会を提供することができると考える。